

理系

令和八年度 東京淫夢大学入学者選抜試験問題

国語

【野獣医・理・工・農・情報学部】

二〇二六年二月二六日(木)実施(六〇分)

【注意事項】

- 一、試験開始の合図まで、この冊子を開いてはならない。
- 一、落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所などがあつたら、直ちに申し出よ。
- 四、大きさの不適切な枕があつた場合は、試験監督に申し出、回収してもらふこと。
- 五、氏名及び解答は必ず各問題別の答案用紙の所定の欄に記入すること。
 - 一、この冊子の余白は草稿用に使用してよい。
- 四、試験時間中に野獣の咆哮が聞こえた際は、試験監督の指示に従い避難すること。
- 八、試験時間中は周囲の人の答案用紙をチラチラ見てはならない。
- 十、試験終了後退室の許可があるまでは、退室してはいけない。

一 次の文を読んで、後の問に答えよ。

【文章Ⅰ】

私は日頃からスマートフォンをよく利用している。中でも動画投稿アプリは特に重宝しており、たとえその日に嫌なことがあっても、スマートフォンを開けばすぐに別世界に入り込んだような気分になれる。タテ型動画は、私に世界中の面白いミームやネタ動画を提供し、手軽なドローパミンを与えてくれる。ヨコ型動画も、流行にのったMAD動画や、コア層向けのネットミーム動画を提供し、束の間の休息を届けてくれる。

このようにして、現代社会ではネットミームは日常的な「ゴラク」として広く共有されている。しかしその中には、販売を目的に撮影された映像や、個人の顔・身体が映った画像が、本人の同意なく加工・拡散されているものも少なくない。適当なSNSを開いてみても、有名人の画像や映像を使ったネタ画像・投稿が散見される。しかしSNS市場が肥大化した今、こうした投稿が取り締まられることはあまりない。取り締まるのに必要なコストがデカすぎるからだと考えられる。

こうした現状に対し、「多くのネットミームは肖像権を侵害している」という批判がある。一方で、ネットミームが私たちに楽しみや安らぎを与えてくれるのも事実であり、その恩恵を無視することはできない。「現代社会において、我々はネットミームとどう付き合っていくべきだろうか。」

この問題を考えるにあたり、まず肖像権侵害について整理する必要がある。肖像権とは、自分の顔や姿を無断で撮影・利用されない権利であり、個人の尊厳を守るための重要な権利である。これが守られない場合、一個人の顔や身体の写真がネットで拡散されることにつながる恐れがある。そして、ネット上に一度拡散された画像や動画は半永久的に残り続け、当事者が意図しない文脈で消費される可能性が高い。さらに、⁽⁶⁾「チヨウシヨウや中傷の対象となれば、精神的苦痛や社会的評価の低下につながることもある。」

一方で、ネット上のミーム動画が肯定的な影響をもっているのも事実である。笑いや共感⁽⁷⁾は人の心を軽くし、孤独感を和らげる力を持つ。特に、不安やストレスが多い現代社会においては、一本の動画が気持ちを切り替えるきっかけになることも少なくない。実際に、面白い動画を見て精神的な落ち込みを克服した人がいる以上、ネットミーム文化そのものを一概に否定することは現実的ではないといえる。

さらに、この問題を(1)サクソウさせているのが、AIを用いた映像生成技術の進展である。ディープフェイクなどの技術により、実在の人物に酷似した顔や姿を簡単に作り出すことが可能になった。その結果、「どこまでが本人といえるのか」「どの程度似ていれば肖像権侵害なのか」という線引きは、これまで以上に曖昧になっている。(2)法的に明確な基準を設けることは難しく、従来の肖像権保護の枠組みは技術の進歩に追いついていないのが現状だ。

では、肖像権の尊重を目指すために、私たちには何ができるのだろうか。

まず重要なのは、動画や画像に映っている人物が、実在する個人であるかどうかを確認する姿勢を持つことである。もし存在が確認されている人物であれば、その映像や画像を用いた作品を安易に拡散しないという態度が求められる。一方で、その人物の性別すら分からない場合や、現実世界に存在した痕跡が確認できない場合など、架空と考えられる人物については、肖像権を持つ主体そのものが存在しないため、同じ配慮を必要としない。肖像権はあくまで「権利を持つ実在の個人」を前提とした権利であり、この点を意識することが、表現の自由を守ることもつながる。

以上を踏まえると、ネット上のコンテンツは人を救う力を持つ一方で、人権侵害という重大なリスクも併せ持っていることが分かる。確かに、ネットミームは面白い。しかしAI技術の発展によって法的規制が困難になる中、これからのネットミーム文化において重要なのは、制度だけに頼るのではなく拡散する側一人ひとりの冷静な判断である。例えば、最近私は長年にわたって実在が確認されていない、とある性別不詳の女性に関するコンテンツを楽しんでいる。このような(3)賢い選択をすることで、我々一人ひとりが人権の尊重に貢献できるのである。

冬が過ぎて春になり、春が過ぎて夏になり、夏が終われば秋を経てまた冬になる。ネットミームの(4)エイコセイスイは早いもので、一つのコンテンツは永遠には輝けない。我々はそれぞれのミームの夏の部分だけを楽しみ、冬になれば捨ててしまう。しかしもしも、真夏であり続けるネットミームがあれば、それはやがて文化へと昇華するのではないか。そうなってしまったら、我々は一つの文化としてそのコンテンツを保護せざるを得なくなってしまう。肖像権の尊重と文化保護のどちらを優先すべきか。(4)今、我々はネット文化と人権の関係を改めて問い直す時代に生きているのかもしれない。

(鎗升根『頭にきますよ!』より)

【文章Ⅱ】

平成期のインターネット^(c)黎明期は、ある意味では天使の楽園であった。そこでは、限られた参加者同士が関心を共有し、現実社会で居場所を得られなかった者も、経済的に自立していない者も、相対的に平等な立場で活動することができた。いわばインターネットは「内輪」として機能し、その内部では独自の規範や美意識を伴ったコンテンツが形成されていった。それらのコンテンツは、外部からの評価を前提とせず、統一的な指導者が存在したわけでもない。それにもかかわらず、動画や文章といった媒体を通じて自律的に規則が形成され、サイバーワールド全体に拡散していった。この点にこそ、当時のインターネット文化の特質があったと言える。

しかし、インターネットの全国的普及は、その構造を変質させた。かつて「内輪」として機能していた空間は、参加者の急増によって境界を失い、内と外の区別が曖昧になった。掲示板の会話は断片化され、再編集され、ショート動画として消費される。共有されていた映像や言語表現は「ネットミーム」として^(f)揶揄され、外部の視線のもとに晒されることとなる。

そもそもネットミームとは、本来ある共同体内部で成立した文脈依存的な表現が、外部へと拡張し、流行として再編成される過程にあるコンテンツのことである。有名になること自体が直ちに否定されるべきではない。しかし、有名になるとは、評価の制度へ組み込まれることを意味する。評価の対象となった瞬間、内輪の論理は外部の基準によって測られる。その結果、内輪で許容されていた表現は批判の対象となり、創作者は外部からの関心を意識せざるを得なくなる。過度な大衆化が招く結末、それは^(g)本当の意味で自由な創作活動の終焉である。

さらに、一度広く共有されたミームは忘却されにくい。流行が終息しても、その名称は記憶に残り、再び想起される。したがって、かつての内輪を同一の条件で再構築することは困難であるといえる。それは、評価の視線が可視化された瞬間から持続的に作用するからである。

もつとも、大衆化が全面的に否定されるわけではない。若年層の参入は、文化の継承と変容を可能にする。新たな担い手が登場することで、ミームは変容し、別の形態へと展開する可能性を持つ。インターネットとは、本質的に関心の移動と再編の場であり、固定化された共同体の永続を保証するものではない。

それでもなお、^(e)かつての内輪は戻らない。内と外の境界が溶解した現在において、我々にできることは、新たな局所的共同体を模索し続けることである。閉じられた楽園は失われたが、限定的な共感の場を構築することはまだできる。もし内輪が破れたのであれば、また内

輪を誕生させるまでである。

春が再び訪れるとは限らない。しかし、新たなコンテンツの源泉を自ら生み出すことは可能である。内輪の破壊と構築が無秩序に繰り返される、インターネットの(g)コンテンツ時代が、まさに今訪れようとしている。

(焼田夏奈『野獣の咆哮がもたらすもの』より)

問一 傍線部(a)と(g)について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 傍線部(1)について、著者がこの問いに対して出した結論をまとめよ。

問三 傍線部(2)とあるが、その理由を簡潔に説明せよ。

問四 傍線部(3)について、「賢い選択」を説明したものとして最も適切なものを次のうちから一つ選べ。

- ① AIによって生成されたネットミームの動画を楽しむこと。
- ② 架空と考えられる人物に関するネットミームを楽しむこと。
- ③ 法律による規制がされていないネットミームを楽しむこと。
- ④ 女性に関するネットミームを楽しむこと。

問五 傍線部(4)とあるが、それはなぜか説明せよ。

問六 傍線部(5)はどのようなことか、説明せよ。

問七 傍線部(6)について次の問いに答えよ。

- (i) 著者がここで述べている「内輪」とは何か、説明せよ。
- (ii) 「戻らない」のはなぜか説明せよ。

問八 文章Ⅰと文章Ⅱの双方の著者は「ネットミーム」をどのようなものとして捉えているか、その相違点を説明せよ。

問九 文章Ⅰの著者である鎗升根が書いた作品を次の選択肢から一つ選べ。

- ① 淫夢語録全集
- ② 真夏の夜の豚夢 第四章 野豚先輩
- ③ ありがとう、茄子
- ④ ホモと見るインムチャーハンの作り方

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。

東京淫夢大学迫真空手部の部員である鈴木、三浦、木村の三名は、今日の激しい稽古を終えて自分たちの部屋に戻ってきた。以下は、その後に続く一場面である。

合宿二日目のメニューがよほどきつかったのだろう。三人とも疲労困憊のまま部屋に戻ってきた。扇風機もない和室には熱気がこもっている。荷物を放り出すと、三人は同時に服を脱ぎ始めた。

鈴木「ぬわあああああん疲れたもおおおおん」

三浦「チカレタ…」

鈴木「いやもうキツかったつすね今日はー」

三浦「ああもう今日は…すっげえキツかったゾ」

木村「ホントに…」

鈴木「何でこんなキツいんすかねえもも…」

木村「キツイですね…」

鈴木「やめたくなりますよ、なんか部活う…」

三浦「どうすつかなく俺もな…」

三浦「ハァ…」

鈴木「三浦早いつすね…」

三浦「シャツがもう…ビショビショだよ」

木村「ウフフツ」

鈴木「風呂入ってさっぱりしまししょうよ…」

三浦「入ろうぜ二人とも」

木村「そうですね」

三浦「うし」

三浦は服を脱ぎ終わって一目散に風呂場へと向かう。

鈴木「ふぁー、待ってくださいよお」

鈴木は三浦の後を追いかける。

三浦「おい、木村早くしろ」

木村「あっ…」

鈴木「早くしろよ」

宿泊部屋に備え付けられている小さな風呂場に一行は入った。まず木村が湯船に浸かる。

鈴木「バックサイド洗いますね」

三浦「オッス」

鈴木「ああもう、疲れましたねえもう」

三浦「ああ今日は…大変だったなーもう」

鈴木「こんな毎日続いたらもう、やめたくくなりますよね」

木村「ですね…」

三浦「なあ。木村も今日疲れたろう、なあ」

木村「疲れました」

三浦「なあ？」

鈴木「じゃあ流しますねー」

三浦「おお、頼むぞ」

鈴木「ドアラア…」

三浦「ふう…」

鈴木「頭いきますよ」

三浦「おっ」

鈴木は頭から水をかけて三浦の体を流す。三浦は満足そうに頭を抱える。

三浦「あーもう一回いってくれ」

鈴木「いいっすか？はい」

三浦「お、サンキュ」

鈴木「はい」

【中略】

三浦の体を洗い終わって去ろうとする木村に、三浦は難癖をつける。

三浦「あつ、おい、待てい」

鈴木「ふう」

三浦「まだ肝心な所洗い忘れてるゾ」

木村「え、肝心な所…？」

三浦「何トボケてんだよ、ここ洗えよ」

木村「あ、わかりました…」

鈴木「X…」

鈴木「何だ木村嬉しそうじゃねえかよー」

木村「いやーそんなこと…」

(誘惑のラビリンス 第三章『空手部・性の裏技』より。)

問

X

に当てはまる言葉は何か。次の選択肢の中から一つ選び、選んだ根拠を明確にして364字以上514字以内で理由を書け。

- ① とんにく
- ② やんほぬ
- ③ かんのみほ